



Title	日本語教育史研究方法論の再検討のために・その3:「自虐」と「自尊」のはざままで
Author(s)	中村, 重穂
Citation	北海道大学留学生センター紀要, 14, 50-60
Issue Date	2010-12
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/46742
Type	bulletin (article)
File Information	JISC14_004.pdf



[Instructions for use](#)

日本語教育史研究方法論の再検討のために・その3 —「自虐」と「自尊」のはざままで—

中 村 重 穂

[Abstract] Among the discourse of scholars on the historical study of Japanese language teaching, some self-tormenting opinions are found. In particular, Seki, Tani and Matsunaga insist on and deplore the low academic status of the historical study of Japanese language teaching in the field of Japanese language teaching as a foreign language. The basis of their insistence is that the historical study of Japanese language teaching has not been included in the Test Content Specification of the Japanese Language Teaching Competency Test held by JEES.

On the other hand, another phenomenon is observed among these scholars' discourses that self-torment is often easily replaced by self-respect, especially after the acceptance of historical studies into the Test Content Specification mentioned above around 2000 - 2001.

However, according to the research by the author, their discourse on the status of the historical study of Japanese language teaching is thought not to be appropriate. This is because from the middle of 1980's, academic papers in this field have been increasing gradually up to the present. The author criticizes Seki's contradiction between the productive opinions on the historical study of Japanese language teaching and his attitude of self-torment and self-respect.

Finally, the author presents the idea of "Meta-historical study of Japanese language teaching" and its practical cases written by the author himself as the way to resolve these issues.

1. はじめに

筆者は、かつて「日本語教育史研究方法論の再検討のために」〔中村(2002)〕及び「日本語教育史研究方法論の再検討のために・その2」〔中

村 (2008)] という小文を書いたことがある。「その2」を書いた段階で「その3」を書くことは最早あるまいと思っていたのであるが、心ならずも今回「その3」を書くことになってしまった。日本語教育史研究の動向がはらむ問題については、既に中村 (2010a) で論じておいたが、あらためて今日 (まで) の研究を振り返ると、日本語教育史研究者のより根本的な意識、あるいは研究領域に対する自己認識が抱えるある種の歪みが目に付き、同じ研究者としてこれをこのままにしておくべきではないという義務感から三度筆を起すこととなった。

以後の論述に於いては、上記の問題点を日本語教育史研究に於ける「自虐」と「自尊」というキーワードで括り、その実態を明らかにしていきたい。その上で、その解決の方策と、日本語教育史研究の今後のあるべき形について若干の示唆を行うことが小論の目的である。

2. 日本語教育史研究(者)に於ける「自虐」

日本語教育史研究者の言説の中には、日本語教育史という自己の専門領域に対する否定的な意識あるいは感情が看取されることがある。それを筆者は小論で「自虐」と名づけ、その例を幾つか示したい。例えば、関正昭は、その諸論考で日本語教育史の位置づけ(の低さ)を説いている。年代順に挙げていくなれば、まず関 (1997: 61) に於いて、

「筆者の記憶では、本誌 [『日本語教育』—引用者註] の展望号に『日本語教育史』が取り上げられるのは初めてではないかと思う。それだけ、日本語教育史の研究は他の分野に比して重きを置かれていなかったか、研究成果が十分ではなかったということになるか。… (中略) …この間 [1962~1997年—引用者註] 日本語教育の言語政策史的研究は、日本語教育界からは敬遠されてきた向きがある。」

と述べ、次いで関 (2002: 72) に於いて、日本語教育能力検定試験の出題範囲としての「日本語教育史」の扱いに触れて、

「いずれにせよ、『日本語教育史』は『付け足し』のような存在であった。」

と述べている。これらの、「日本語教育界からの敬遠」と「日本語教育能力検定試験に於ける『付け足し』扱い」という二つは、関が繰り返し主張するところであって、関 (2005) でも、

「… (前略) …『言語の外側から政策的力によって変化させようとする

るもくろみ』という視点からの日本語教育史研究に限って言えば、この研究は日本語教育界からは敬遠されてきた向きがある。」(p.80)

「第1回の日本語教育能力検定試験が実施されたのは1988年1月のことであった。このころはまだ日本語教育史研究は、日本語教育研究の一分野として一人前に認知されていなかった。…(中略)…『日本語教育史』は『付け足し』のような存在であった。」(p.91)

と記されている。特に後者の、日本語教育能力検定試験に於ける扱いを日本語教育史研究のあり方と関連づける見方は、他の論者にも共通するところであり、例えば、松永(2008:4)は、

「日本語教員養成の教育内容が大きく転換するのは、文化庁が2000年に刊行した報告書『日本語教育のための試験の改善について』において、日本語教育能力検定試験の新しい出題範囲を提言して以降である。…(中略)…日本語教育学分野における本研究の位置づけから見て、日本語教育史に対する認識の重要性が増していることも注目すべきである。」

と述べ、また、多仁(2006:275)も、

「これまで日本語教師養成講座を担当する教師に言語学や国語学を専攻した人が多かったせいも、技術的側面に重点が置かれてきたが、最近になって日本語教育能力検定試験で教育史の分野の比重が高まった事情もあり、日本語教育史の概要を専門科目に組み入れようとする試みがふえつつある。」

と記している。

これらから関、松永、多仁ともに2000～2001年にかけて公にされた日本語教育能力検定試験の出題範囲見直し以前には、日本語教育史研究は日本語教育の世界に於いて充分認知されずその地位を確立できていなかったと考えている、と理解することができる。しかし、この認識は真に妥当なものなのであろうか。

結論を言ってしまうえば、筆者の見るところ、この認識は事実誤認に基づく、あるいは事実認識を欠いた主観的印象の範囲を出るものではない。筆者は、中村(2010b)で1950～2009年までの60年間に刊行された日本語教育史関連(一部留学生教育史を含む)の著書・論文の分類とリストを調査・提示したが、これを見ると、1984年までは多くても年間一桁～20本前後で推移していた論文本数が、1985年には28本となり、翌1986年には一挙に41

本と大幅な増加を示す。加えて、この年には日本語教育学会誌『日本語教育』60号が「日本語教育史」を特集として組んでいる。そして、以後増減を繰り返しつつ研究論文の本数は全体的に増加していき、1993年以降は恒常的に毎年50本～100本超の論文が刊行されている。この研究動向について、筆者は、中村（2010a：3）で、

「1983年の『留学生受け入れ10万人計画』発表、1984年の『日本語能力検定試験』開始、1985年の筑波大学と東京外国語大学に於ける日本語教育主専攻課程の設置といったできごとによって日本語教育に対する社会的認知やその重要性の認識が深まる中で、それ以前の日本語教育の流れを一度は辿り振り返っておく必要があるという意識に基づいて行われた」

と分析し、1985年を（1985年に書かれた論文が翌1986年に公刊されたという可能性も含めて）「それ以後の研究の展開の跳躍台となった年」と位置づけた。他方で、勿論一数えたことがないから分からないが—所謂文法や教授法関係の論文数がより多いであろうことは想像に難くない。であるとしてもこれだけの研究実績がある分野を認知不十分であるとか、ましてや「付け足し」と判断する根拠は筆者には判然としない。上述の社会的背景と研究動向を考えれば、日本語教育史研究への着目・展開は、少なくとも前記の三人が考えて（あるいは思い込んで）いたよりも早く始まっていたことが指摘可能であり、先の引用の内容は妥当なものとは認めがたい。

さらに、こうした日本語教育史に対する（事実誤認に基づく）否定的認識＝「自虐」はある種のマイナスの意味づけを伴った評言と結びついて語られてしまうことすらある。先の関（2002：72）や関（2005：91）に見られる「『付け足し』のような存在」というのはその一つであるが、関（2002：72）はそれにとどまらず、

「筆者は大学や民間の日本語教授法講座で『日本語教育史』を講ずる際には、『日本語教育能力検定試験には日本語教育史からの出題は少ない。よって、私の講義は試験対策としては役に立たない。しかし、これからの日本語教育のあり方を考えるには欠かせない領域なのだ』と主張しつつきてきた」〔下線部引用者〕

とまで書いている。この関の発言について言えば、日本語教育史という学問領域に対する理解と正当な認識の確立を願うのであれば、その本人がいかにかに日本語教育能力検定試験を意識したからと言って自ら「役に立たない」

と言ってしまうのは自己欺瞞以外の何ものでもない。仮にこの一文がないとしても、上の引用の内容には何の不都合もないはずである。

そして、こうした「自虐」は、酒井（2009：24）の以下の記述に至って一つの極点を示す。

「日本語教師にとって日本語教育史などは陰^{ママ}の薄い存在でしょう。だからといって学ぶことを放棄することは国際交流の舞台に立とうとするものとしては失格です。」〔下線部引用者〕

酒井が何を以て日本語教育史は影が薄いと主張するのか、本人が根拠を明らかにしていないので筆者には計りかねるが、これもまた主観的印象に過ぎないと思われる。否、主観的印象ならまだよい。「～などは」、「～でしょう」と書いたりするあたりには読者に拗ねてみせて気を引こうとする卑屈さが滲み出ている。酒井は「だからといって学ぶことを放棄するのは」と書いているが、もし日本語教師（志望者）が日本語教育史を学ぶことを放棄することがあるとすれば、その原因（の一つ）はむしろ酒井のように、自己の専門領域に確固たる自信を示せず読者に媚びることしかできない態度への忌避から来るものであろう。このような記述を為す酒井こそ「国際交流の舞台に立とうとするものとしては失格」であると筆者は考える。

仮に多大の譲歩を行って日本語教育史に対する認識の未確立を認めたとしても、かかる情況をもたらしているのは他でもないその情況自体を「自虐」的に語る研究者自身の心性であることを指摘して本章を終わりたい。

3. 日本語教育史研究（者）に於ける「自尊」

前章では、日本語教育史研究（者）の中に見られる「自虐」を取り上げ、その問題性を指摘した。しかし、この「自虐」は、時としていとも簡単に「自尊」に転化してしまう。本章ではその実態を明らかにしたい。

再び関（2002：75）を見ると、そこでは日本語教育史が日本語教育能力検定試験の出題範囲に含まれるようになったことについて、

「日本語教育史がようやく日本語教育の能力を検定する項目としてまともに位置付けられることになったのである。日本語教育史を研究する者として、この答申案を作成された委員のご賢察に対して敬意を表す」〔原文傍点下付〕

とその“まとも”ぶりを手放しで喜び、さらに関（2005：92）でも、

「…（前略）…日本語教育史は『日本語教員の資質・能力』と並んで

『社会・文化・地域』の領域に位置付けられることになった。日本語教育史がようやく日本語教育の能力を検定する項目としてまともに位置付けられることになったわけである」

と同様の文言を繰り返した後、

「繰り返すが、日本語教育史研究は日本語教育のあり方を考えるには欠かせない研究領域である。」

と「自尊」してしまう。これは、先に引用した多仁(2006:275)も同様で、前の引用箇所続けて、

「日本語教師としての実務をこなしながら、日本語教育史を研究してきた著者にとっては嬉しいことであり、学生たちの熱意も高く、心強く思っている。」

と述べている。松永(2008:4)はこれらに対して比較的冷静ではあるが、それでも先の引用の末尾に、

「日本語教育史に対する認識の重要性が増していることも注目すべきである。」〔下線部引用者〕

と書いているあたりに日本語教育史が重視されることになったことへの密かな自尊心が窺える。

こうした「自尊」は、日本語教育史への認知度の高まりによって先に述べた「自虐」(を惹起する情況)から転化したものであることは関の記述から容易に見て取れるし、筆者も同じ日本語教育史研究者としてそうした心情の変化を理解できないわけではない。しかし、既に述べたように、その「自虐」(を引き起こしている根本の事実認識)が妥当ではない以上、この「自尊」にも所詮妥当性はない。

しかも、こうした「自尊」にもかかわらず、現実にはそれを裏切る認識が生じていることを関らはどこまで知っているだろうか。この「自尊」の裏側での日本語教育史に対する日本語教育能力検定試験受験(準備)者や末端の日本語教師の受け止め方は、全く異なっており、実に醒めている。以下の記述はウェブサイトに掲載されているものであるが、

「いわゆる暗記部分は大体十分だと思います。言語学の基礎や日本語教育史などは詳しすぎる位。」〔『日本語オンライン』〕

「ここしばらく、授業で『日本語史』や『日本語教育史』、『言語学』の授業など、歴史モノが続いています。…(中略)…私は、『ただ単に暗記する』ことが比較的多い、この歴史モノがすごく苦手です。」〔『日

本語教師Bの日常』)

「●日本語教育史…(中略)…整理すると結局は暗記暗記なのだが、非常に興味深い歴史が盛りだくさんだ。」〔蒔野雅紀氏のブログ〕
のように、日本語教育史は“暗記物”としか受け止められていない。

勿論、このような認識が生み出される責任は、日本語教育史(のみ)にあるのではなく、日本の歴史教育一般の問題、及び、近年の所謂「非実学」=成果が直ちに得られにくい学問領域-歴史学もここに含まれる-に対する逆風などにあることは充分理解できる。既に1996年に島田泰氏(当時立正大学学生)は、

「自分の経験からいうと、小学校から高校までの歴史の授業は、教師が板書したことを生徒がノートに書き写す、この繰り返しであった気がする。…(中略)…ただ書き写し、それを丸暗記するだけでは、戦争・犯罪・政治などは知識になるだけである。」〔島田(1996)〕

と歴史教育が“暗記物”にしかになっていない状況を鋭く告発している。かかる社会的背景のもとに、上記のように日本語教育史をも“暗記物”と受け止めてしまう知的風土が形成されたことはそれなりに認めざるを得ない。が、そうであれば結果的に、日本語教育史の社会的認知度の高まりに対する「自尊」は、誤った事実認識に基づいた研究者の、外部環境に無頓着な、謂わば“内輪”の自閉的現象でしかなく、真の認知度の向上や、真に「自尊」し得る情況に結びついていないのではないかということを筆者は深く懸念するところである。

むしろ、日本語教育能力検定試験の出題範囲に含まれることでこのような受け止め方が生じてしまうくらいであるならば、学問のあり方としては、たとえ規模は小さくともたとえ大きな関心は抱かれなくとも「自虐」や「自尊」と無関係な、研究者の“知の共同体”によって学問の矜持を保つ方向を目指すべきだったのではないか。日本語教育能力検定試験の出題範囲になったことが、関や多仁が言うように、本当に「自尊」に値する“まとも”で“嬉しい”ことであったのか、という点について筆者は大きな疑問を有するものである。

4. 最後の問題-自己認識の陥穽について-

前章までで日本語教育史研究(者)の自己認識について考えるところを述べてきた。しかし、真に重大な問題は、前記の事柄にとどまるものでは

ない。筆者が論難してきた「自虐」と「自尊」については、既述のように日本語教育能力検定試験の出題範囲として採り上げられたという事実がいずれの論者においても要となっている。解決されるべき問題として筆者が最後に指摘しておきたいのは、この事実に立脚してしまうこと自体が、一特に関正昭に於いては—日本語教育史という学問とその自己認識を陥穽に落とし込む危険な企てである、ということである。

まずあらかじめ述べておかなければ、日本語教育能力検定試験（にとどまらずおよそあらゆる語学関連の検定試験）はそれ自体一つの制度であり、一定の言語（教育）政策が具現化されたものであることは言を俟たないであろう。そして、そうした言語（教育）政策は、言うまでもなくその社会、あるいは言語（教育）主体が置かれた環境の変化に伴って、その必要性が認知され、計画が立案され、具体的な制度整備が実施されることによって現実化されるものであることも容易に理解されるであろう。そのことを念頭に置いた上で以下の文章を読んでみよう。

「…（前略）…日本語教育はその時々時代の趨勢にいと簡単に押し流されるという不安定性をはらんでいる。であるからこそ、日本語教育にたずさわる者は、日本語教師自らのあり方、日本語教育のあり方を常に問いながら、時代の波に翻弄されない足腰のしっかりした日本語教育の確立を目指していかなければならない。」

「日本語教育史を振り返れば、日本語教育界はその時々国家体制・国際情勢・社会情勢等と密接な関わりを持ち（持たされ）、ときには、翻弄もされてきたことを如実に知らされる。であるからこそ、日本語教育史研究の意義は、こうした歴史から学び、そこから、日本語教育の進むべき指針を得ることにあると言えよう。」

前者は、関（1997：4）からの、後者は同じく関（2005：204）からの引用である。日本語教育が時代の趨勢に翻弄されてきたということ、及び日本語教師はそうした趨勢に押し流されない確固たる指針を持つべきであるということは、これらの引用に見られる通り関が繰り返し主張するところである。

しかし、今までの論述から直ちに見て取れるように、ここには関の大きな矛盾点が明確に浮かび上がってくる。既に述べた通り、関や多仁や松永に見られる「自虐」と「自尊」という感情—特に後者—は、日本語教育史という学問領域が日本語教育能力検定試験の出題範囲に採択されたか否か

という事実に根ざして抱かれ、語られたものであった。ところが、このように日本語教育能力検定試験という、ある種の時代の要請によって生まれた制度に包含されるか否かで、自己の学問領域の位置づけを計ってしまうことは、まさに関自身が問題視している「その時々時代の趨勢にいとも簡単に押し流され」、「時代の波に翻弄」されている態度に他ならない。敢えて俗な言い方を用いるならば、日本語教育能力検定試験という“他人様の作った基準に自分を当てはめて一喜一憂している”態度と言い換えて良からう。そして、こうした矛盾を犯しながら、当の関自身をはじめとして誰もそのことに気がつかない、ということが日本語教育史研究(者)の最も大きな不幸であり、解決されねばならない問題なのである。

誤解を避けるために付言しておくが、筆者は、関が上で主張していることを否定するものではない。筆者が問題とするのは、日本語教育史研究(者)にとって極めて重要な意義ある主張が当の提唱者によって裏切られているという現実であり、さらに言えば、それほどまでに日本語教育史研究(者)は一関ほどの研究者でも一「時代の趨勢にいとも簡単に押し流され」てしまう、というこの学問領域の脆さである。

では、このような日本語教育史研究(者)の自己認識上の問題点を解決するためにはどのようにすればよいのか。これについて筆者は、即答することはできない。しかし、解決には至らずとも問題を問題として析出し得る方策は可能であると考え。筆者は、中村(2010a)で「メタ日本語教育史」という日本語教育史研究の下位領域あるいは研究の視座を提唱し、過去に行われた「メタ日本語教育史」的研究の洗い出しと、平高史也、及び松岡弘の所論に対する批判という形でその実践を提示した。筆者は、これを唯一絶対の批判的試みとする意図はないが、今後、このような試みが一つの遂行可能な方法的企図として多くの研究者によって行われ、日本語教育史研究(者)の“自閉的な感情世界”が破壊―解体されることこそがまさに関の「日本語教育史研究の意義は、こうした歴史から学び、そこから、日本語教育の進むべき指針を得ることにある」という主張を実現させるものにつながることを示唆して、ひとまず小論を終えることとしたい。

参考文献

酒井順一郎(2009)「0からの日本語学習・教育」鈴木紳郎編(2009)『やさしい日本語指導3 日本語教育の歴史と現状』国際日本語研修協会

pp.4-24

島田泰 (1996) 「論壇：思考力を高める『歴史教育』に」『朝日新聞』1996
(平成8)年4月4日朝刊(12版) p.4

関正昭 (1997) 「日本語教育史」『日本語教育』94号 日本語教育学会
pp.61-65

関正昭 (1997) 『日本語教育史研究序説』スリーエーネットワーク

関正昭 (2002) 「日本語教育史に学ぶ」椎名和男教授古希記念論文集刊行
委員会編 (2002) 『国際文化交流と日本語教育』凡人社 pp.62-73

関正昭 (2005) 「日本語教育史研究の領域」松岡弘・五味正信編著 (2005)
『開かれた日本語教育の扉』スリーエーネットワーク pp.79-93

関正昭 (2005) 「日本語教育史・言語政策史」縫部義憲監修 (2005) 『講座・
日本語教育学 第1巻 文化の理解と言語の教育』スリーエーネット
ワーク pp.190-207

多仁安代 (2006) 『日本語教育と近代日本』岩田書院

中村重穂 (2002) 「日本語教育史研究方法論の再検討のために」『北海道大
学留学生センター紀要』第6号 北海道大学留学生センター pp.106
-114

中村重穂 (2008) 「日本語教育史研究方法論の再検討のために・その2—
安田一松岡「論争」その他の問題に寄せて—」『北海道大学留学生セ
ンター紀要』第11号 北海道大学留学生センター pp.56-75

中村重穂 (2010 a) 「日本語教育史参考文献「論文編」から見た日本語教
育史研究の研究動向と課題」長谷川恒雄研究代表 (2010) 『第二次大
戦期日本語教育振興会の活動に関する再評価についての基礎的研究
報告1』(平成18年度～平成20年度科学研究費補助金基盤研究(B)・
課題番号18320085) 学校法人長沼スクール pp.2-11

中村重穂 (2010 b) 「【資料】日本語教育史参考文献—「著書編」及び「論
文編」—」長谷川恒雄研究代表 (2010) 『第二次大戦期日本語教育振
興会の活動に関する再評価についての基礎的研究 報告1』(平成18
年度～平成20年度科学研究費補助金基盤研究(B)・課題番号
18320085) 学校法人長沼スクール pp.12-107

松永典子 (2008) 『「総力戦」下の人材養成と日本語教育』花書院

参考ウェブサイト

- 『日本語オンライン：めざせ検定合格&自習室－掲示板10－』 「No.2375
Re：★マニュアルより「考える」勉強!？」 2004年12月26日午前1
時13分発言（発言者・鏡子） URL=[http://www.nihongo-online.jp/
tree10/treebbs.cgi?kako=1&log=2375](http://www.nihongo-online.jp/tree10/treebbs.cgi?kako=1&log=2375) （2010年11月11日アクセス）
- 『日本語教師Bの日常』 「日本語の歴史」 2007年9月9日午後11時47分書
き込み（記入者・マボ） URL=[http://blog.alc.co.jp/blog/3000031/
93202](http://blog.alc.co.jp/blog/3000031/93202) （2010年11月11日アクセス）
- 「蒔野雅紀氏のブログ（特定表題無し）」 2009年5月17日書き込み
URL=[http://nihonnoitoko.cocolog-nifty.com/blog/2009/05/4652120-c
e03.html](http://nihonnoitoko.cocolog-nifty.com/blog/2009/05/4652120-ce03.html) （2010年11月11日アクセス）

なかむら しげほ(留学生センター准教授)